

令和2年度 環境で地方を元気にする
地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

成果報告会 発表資料

活動団体名：美星町観光協会

活動地域：岡山県井原市美星町

活動におけるテーマ・キャッチコピー

美しい星空環境を守り育てる「星の郷」まちづくり

地域のありたい未来の実現のために 今年度取り組んだこと

- 光害防止条例制定30周年を機に、国際認定制度「星空保護区・コミュニティ部門」のアジア初認定に向け、町内の照明環境の改善に取り組み、申請に向け概ね整備が完了
(町内防犯灯 約400台、公共施設屋外照明 約370台 → 町並みが温かい色に)
- 上記の持続可能な取組に際しては、パナソニック社と技術連携し問題解決に取り組んだ。
→ これまで20以上のメディアで官民連携（SDGs目標17）の事例として紹介される。
- 星空保護区認定後を見据え、交流・関係人口の増加が見込まれる中であって、どのような地域課題があり、どう取り組むべきかについて情報収集すべく、令和2年7月～8月に地元関係者（個人・団体）や行政機関、商工関係団体、金融機関、大学、本市と関わりのある大手企業など、約20者の多様な関係者との意見交換を行った。
→ 地元と外部関係者が自由闊達に意見交換（アイデア交換）できる場が必要
- 「美星・星の郷まちづくりコンソーシアム」の立ち上げ（令和2年10月5日）
→ これまで4回会議（フィールドワーク、ワークショップなど）を開催し、地域資源の現地視察や生産者等との意見交換、会員相互間でのアイデア出し等を実施
- 上記コンソーシアムは、立ち上げ当初は30名程度であったが、その後も地元において継続的に声掛けを行い、多様な関係者（特に子育て世代の保護者や若い世代）を新たに巻き込んだ。
→ 現在は50名規模になっている。

地域のありたい未来の実現のために 今年度取り組んだこと



屋外照明環境の改善
(パナソニック社との技術連携)



地域資源を巡るフィールドワーク
(R2.11.25開催)



星・宇宙を語るシンポジウム
(R2.12.12開催)



アイデア出しワークショップ
(R3.1.1.23開催)

地域のありたい未来の実現のための「事業のタネ」

1	事業名	有償観光ガイド養成事業		
	概要	星空保護区認定後の観光客の増加を見据え、単なる交流人口の拡大のみならず、美星を好きになってくれるファンを増やし、関係人口の創出につなげるため、またガイドに携わる人が生き生きと活躍する人づくりにつなげるため、美星町観光協会が中心となって、天文関係者等の協力をいただきながら、美星町が誇る「美しい星空」を解説できる有償観光ガイドを養成するもの		
	課題・ボトルネック	「美しい星空」への想いを語れる人材がおらず、旅行者へのおもてなしができていない。	力を借りたい人物・企業像	天文関係者、美星天文台友の会「美星スターウォッチングクラブ」、（一社）星空保護推進機構

2	事業名	体験型観光コンテンツ開発事業		
	概要	「美しい星空」のほか、伝統文化や農産物などの豊かな地域資源を有してはいるものの、昼間から夜にかけて長時間の滞在につながる仕掛けがなく、旅行者への十分なおもてなしができておらず、その土地の良さを伝えるサービスがないことから、体験型観光コンテンツの開発や磨き上げを行うもの		
	課題・ボトルネック	昼間から夜にかけて長時間の滞在につながる仕掛けがなく、地域の消費拡大が図れない。	力を借りたい人物・企業像	（公社）岡山県観光連盟、天文関係者、旅行事業者など

3	事業名	6次産品（土産品）開発事業		
	概要	新鮮野菜などの農産物（1次産品）が揃う産直市場は買物客で賑わうが、まちの最大の観光資源である美星天文台などの観光地では、地域をPRする6次産品（土産品）が少なく、地域消費の拡大につながっていないことから、その解決に向け、土地の良さを伝える6次産品（土産品）の開発に取り組むもの		
	課題・ボトルネック	美星天文台などの観光地では、地元の土産品が少なく、消費拡大につながっていない。	力を借りたい人物・企業像	備中西商工会、星の郷青空市株式会社、JA晴れの国岡山、農産物生産者

今年度の環境整備の取組による地域の変化や気づき

話を聞きに行く！

- 星の郷まちづくりに向け、多様な関係者と意見交換し、地域プラットフォームとなる「星の郷・まちづくりコンソーシアム」を組織化していく中で、**地元関係者からは**「自分たちが本気にならなければ」「いろいろな事ができそうな気がする」といった**前向きな発言を聞く**ようになり、また、**外部関係者からは**、事業者として「美星町のまちづくりにどのように関われるか真剣に考えたい」といった**協力的な意見をいただく**など、地域や周囲の理解が深まってきている。

地域のコンセプトを描く！

- 地域のありたい未来を語り、地域版マンドラを作成したことで、中心の核である「持続可能な星の郷まちづくり」に向かって、それぞれがバラバラではなく**関係性を持ってつながり、影響し合っていることを理解**した。また、紙上では平面だが、時間軸を加えて立体的（躍動的）に物事を動かしていく必要があることに気づき、事業の具現化に向け少しずつ動き始めている。

事業のストーリーを語る！

- 少子高齢化が進み、地域経済が縮小する中で、地域資源を活かしながら持続可能なまちづくりを進めていくには、最終的に地域にお金が落ちる仕組みの構築が重要である。これまで多様な関係者と「事業のタネ」を検討していく中で、それぞれが熱心且つ遊び心を持ってユニークなアイデアを数多く出してくれており、その中から、これまで**あまり知られていなかった地域資源にも気づく**ことができ、また関係者間で共有することで、新たな仕掛けにつながりつつある。

地域の目標を立てる！

- 地域の目標や成果指標を検討したことで、関係者には、いつまでに、何を、どこまで、どのように行うのかといった自分たちの役割や責任を認識いただいたところであり、徐々にではあるが**「自分ごと」として捉えていただける**ようになった。

今年度の取組におけるボトルネックや新たに見えてきた課題

- 「星空保護区・コミュニティ部門」の認定に向けた取組を進める中で、メディア露出が増え、対外的な認知度の向上は図れている一方で、地元住民の中には星空を守る取組や、それを起点とした持続的なまちづくり活動について未だ全く知らない、あるいは興味・関心がない人も多くいるため、**インナープロモーションの必要性**を強く感じている。
- 「星の郷・まちづくりコンソーシアム」の集まりでは、個人として関わる地元関係者は主体的に毎回参加されているが、組織を代表する地元関係者はお客さんの面もあり、欠席されることもしばしば。いかに**地域の団体にも本気で関わってもらうかが課題**
- 「星の郷・まちづくりコンソーシアム」（地域プラットフォーム）が考える事業を具現化していくには、同コンソーシアムだけでなく、やはり**市が強力なバックアップ体制で臨むことが信頼感と推進力アップにつながる**。このため、次年度以降は市内部においても縦割りではなく縦横に連携する**若手職員によるプロジェクトを組んでいただくよう依頼**する必要がある。
- 「集まって意見交換ばかりしては意味がない」「早く具体の事業に一つでも取り組むべき」との発言も出始めていることから、**早期にできるところから実行に移していく**ことが必要である。小さな成功体験を積み重ねることで、関係者や住民の自信になり、より多くの人を巻き込む原動力になると考える。
- 事業の推進に当たっては、人・お金が大事だが、特に人については、**地元で熱い想いと技能を持った担い手がいなければ外から探す**必要がある。

今後の展望

- 事業の検討を着実に進めるとともに、プロジェクトを中心的にけん引する**熱い想いと技能を持った地元人材の更なる発掘**を行う（特に若手人材）。
- 市の広報誌や観光協会広報誌、ホームページやSNS、メディアなどを活用し、美星町の取組や目指す姿、事業を**対外・対内に向けて積極的に発信**する。特に住民向けのインナープロモーションが大事であり、自分事として認識してもらうために、機会を見ては住民向けのセミナーなども効果的に盛り込み、意識の醸成を図る。
- 有償観光ガイド（個人）の養成 → 外部専門家の活用
- 体験型観光コンテンツの開発 → 外部専門家の活用
- 6次産品（土産品）の開発 → 外部専門家の活用
- 養成されたガイドや開発された体験型コンテンツ等を生かし、具体的なビジネスにつなげていけるように、**受け皿組織の継続的な育成指導と関係事業者との連携推進**を図る。
- 星空保護区認定やアフターコロナを見据えて、市との連携によるプロモーションを推進し、積極的な誘客につなげるとともに、**地域の資源や体験型観光コンテンツのブラッシュアップ**を図っていく。 → 地域間の連携による滞在プログラムの造成にもつなげていく。
- まちづくり会社の組織化に向けた検討や事例調査